

医王歌壇



山の歌

責森 秋 霧 朝 光

生きるとは諦めやせじとなるか荒ぶ岬に浜菊の咲く
草木も花開くため陽の光奪ひ合ふと生きる酷薄
ゆへりなく開く聖書のサムエル記インク混じりのわが死紋
雄鶏の衿持といわん雌鳥に虫をねずりて鶴冠ひらかす
ゆりくつと登りゆくとき一歩ずつ山の歌に溶けゆくわれか

フランス一周

千葉 蒲 谷 玲 子

ボンデュガール ローマ時代の橋今も超然としてあめいぢ立つ
白黒映画「港のマリー」観し記憶マルセイユは唯に陽気な港
水源地エビアンの水ぶくみつゝ山青く水清さくに恋ひしむ
ボルドーのぶどう農園の豊満な女よ汝は口ゼの香がする
ホテルタの奇跡に続く洪こうづ寄せ来る波に小石を選ぶ

春の訪れ

神奈川 武 井 忠 夫

子ひを診ると向かつ軒端の紅梅の雨上がりたる朝の華やぎ
ほの紅き枝だれ馬酔木の花房のたわわに咲けり築山の間に
溢るかに馬酔木花房さわに群れ春の息吹きの庭先に充つ
ユキヤナギに花むづ充ひてつちなびきわからい春となづけむかも
朱と黄の彩り著るさき躑躅の“チロニアソラソラ”のお伽めく花

一〇〇九年

東京 小 松 安 彦

山茶花の垣根に沿ひて一輪車練習してゐる一人の少女
今日からは昭和生れの少年と少女はない一月八日
紅梅と雲のあはひに半円と金星仰ぐ立春の宵
年末に買ひこしソクのシクリメンニアの今日も咲き継ぐ
創立は五年前の小学校今年の春も桜はふくべ

泣き虫の歌

神奈川 助 川 信 彦

三つ上の兄あり吾を泣かせし嗤ひつつ相撲の相手させき
冬の夕べに懸図つるし相手が捉へ玄関より外へ出だし鍵閉む
夕星の下にて囁く吾を呼ぶは母の声なり厨戸開く
厨にて独りの遅き夕食を摃つきおかずは真鶴にして

幼稚園は元来嫌ひお遊戯が苦手歯痛を訴へて泣く

記憶残存部分

東京 田 村 豊 幸

古里の春

東京 初 芝 澄 雄

古里の写真手帖にほつづけて鞆に入れて持ち歩くかな
夜中一時アトなに故に田が覚めて薬師如来の事思い出さかな
河原鷄ヒロヒロと跨ぐ鍛冶屋の樹あの少年の頃父母も居たのに
平磯の浜辺に祖父に連れられて牡蠣食べし事なぜか想えり
下妻の中学校服母の家 家は消えても風田數残る

白帆の湯

茨城 羽 生 藤 伍

富士山と筑波の嶺を觀つて入る湖畔に湧きしわが白帆の湯

白帆の湯ひつ三階のビル建ちて見下すわが町更に美し

春来たりと庭の池に水射せば鮭鯉金魚ら群がり浮ぶ

散歩路の滝は私のナイアガラ取水堰よりよく溢れて

鶴が喰い残したる餌台の果物雀ら仲良く啄む

チヨコニー

東京 林 宏 国

春一番吹きて庭きしチヨコニーと君の優しき心寄せ来つ

チヨコニーとしのつじ山に登てて若かりし口の夢ながて入る

ハート形のチヨコを味はふわが心を忘れて過ぐすひととき

チヨコニーと味はひてゐる人の世の夢かひとともといしくとて

チヨコニーとだはつてゐるわが心バレンタインの田は恵みの田

古里の春

バスを下り里に向こし門辺つ梅は早くも花開きいる
陽光に輝やく庭の門辺つ絹田の梅賀やかに咲き
中空に明星光る候となり古里の空に富士を望みぬ
牛込の城門跡の石組や神樂の坂は真直ぐに伸び

市谷の近くに知りし富貴坂ビルの谷間に長く続けり
春のあとずれ

東京 藤 井 淳 子

夜が明けて呼吸をすれば風がきて歌の言葉を教えてくれる
青春の想ひ出の曲を楽しみて時には一人でレコードを聴けり
樹をはなれ土に散りゆくひととせの木の葉の色のれども朝の朝
次の世も女として生れたしと仰げばやせし春のあとずれ
明日といふ未知なるものの嬉しさを心の裡に静かに置かむ

春のあとずれ

東京 藤 井 淳 子

夜が明けて呼吸をすれば風がきて歌の言葉を教えてくれる

青春の想ひ出の曲を楽しみて時には一人でレコードを聴けり

樹をはなれ土に散りゆくひととせの木の葉の色のれども朝の朝

次の世も女として生れたしと仰げばやせし春のあとずれ

明日といふ未知なるものの嬉しさを心の裡に静かに置かむ

回憶のジエームス・チャーチン 神奈川 布 施 徳 郎

田石の煉瓦棟消えし故郷の坂よつ見ゆる町の寂しさ

太い竹の君よ故郷むかしに君づくわぬ「シンガー・リハ」の看板懸せて

街に余る新なるサービスの中学生スマ国防色のわれ思ひ出づ

上映のジエームス・チャーチンを町々に遊びし遠き旧友は語りぬ

「小父さんあのパン取つて」呼ぶ老婆声かけらぬ我も高齢

ハノイ

東京 横田英夫

オートバイ一団となりて走り過ぐサバンナ駆ける「ヌー」の如くに

縦横にオートバイ走る交叉点引かれし水牛悠々と行く
ホーチミン廟小雨に濡れて黙々と入場を待つ長き行列
靈廟の冷たき階を降り行けば遺体置かれり静寂の中
擬然と四人の兵士立ちて居り遺体守りて見送るのもせず

捩り文 大黒勇

こましめの鏡の池よ山鳥の影に愛でつつ色に溺るな かく詠
出せし一歌は、是の草紙の大意にして、張華が博物誌に據れ
るな。足引の山鳥はなづのさんじゆ その美毛モに鑑かがみ、水に映して終日得
たがひず、心惣ほれ田くわ 眩くるきくて 競に溺死するとな。男女の相歡
びて、彼鼻の骸ほを抱きて得去ひず、家を「し身を震ふも、亦これ
と同じかるべし。

櫻亭鰯魚さくていいわしうお

刀筆青砥とうひつあおと石文鸞いしぶみらん水みず箴語しんご

狂歌 大黒勇

無理強ひに生かされしのみ本人は如何なる心のあつたがつや
安樂死認めぬ人は、あゝ無情長く生かして苦しめる氣なり
かくすればかくすればのと知りながらやに、數々の煙草のみの肺
腫瘍者やめことしてもあらね、身は癌末は確信したるとい
し。

診療の報酬引て置かねばからず、殊に精神科の不自由に足り